

第11章 近世ヨーロッパ世界の動向

ヨーロッパは、経済的には海洋進出、精神的には宗教改革、政治的にはイタリア戦争を経て、中世とは明らかに異なる時代に移った。この時代をヨーロッパ史では近世と呼ぶ。

Q それまでの時代と比べ、近世のヨーロッパは何が異なっていたのだろうか。

1 ルネサンス

Q ルネサンスはどのような点で新しく、どのような点で古かったのだろうか。

ルネサンス運動

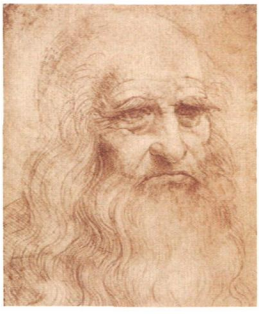
Q ルネサンスの動機はどのようなもので、また、その担い手はどのような人々だったのだろうか。

中世末期のヨーロッパでは、黒死病(ペスト)(→p.126)の大流行によって多くの死者が出たため、生ける者としての人間に以前よりも大きな価値が見出されるようになった。また、イスラーム圏から伝わった諸学問の影響(→p.135)を背景に、自然界に働きかける技術への関心が強まった。このため、自然とその一部である人間が肯定的なかたちで探究されるようになり❶、様々な発見がなされた。これらの動きをもとに、文芸・科学・芸術などの多様な方面で文化活動が展開されるようになり、これを**ルネサンス**(「再生」の意味)と総称する。ルネサンスを担った人々は、キリスト教は否定しなかったが、現世の文化を尊重し、そのもとでは**レオナルド＝ダ＝ヴィンチ**(Leonardo da Vinci 1452～1519)に象徴される文芸や自然諸学に通じた「**万能人**」が理想とされた。ルネサンスはフィレンツェ(→p.120)などのイタリア諸都市で14世紀に始まって、16世紀までに西ヨーロッパ各地へと広まった。

ルネサンスを推進したのは、中世後期以来発展した都市(→p.121)に住む教養人であった。ただし、その多くは**メディチ家**(→p.122)などの大富豪やフランス王・ローマ教皇などの権力者の保護下で活動したため、ルネサンスは既存の社会体制を直接的に批判する運動とはならなかった。

ルネサンスは地中海貿易で栄えたイタリアや、毛織物工業で成長したネーデルラントから他国へと展開した。

❶中世のキリスト教的人間観では、人は生まれながらに罪を負い、不浄で無力な存在とされた。他方で自然界は、神の被造物の最下位に位置する無価値なものとされ、恐怖の対象でもあった。



レオナルド＝ダ＝ヴィンチ



ルネサンス時代のイタリア



「アテネの学堂」 ラファエロ(1483～1520)作。ソクラテス・プラトン・ピタゴラス・アルキメデスなど(→p.73、74)、古代の学者の集いを理想化して16世紀初めに描かれたもの。



コペルニクスの天球図 コペルニクスは、天体観測にもとづいて、宇宙の中心は地球ではなく太陽であることを主張した。

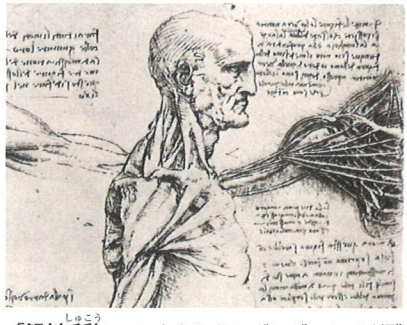
ルネサンスの精神

Q ルネサンスを支えた精神にはどのような特徴があり、また後世に何を残したのだろうか。

ルネサンスの目的の1つは、人が価値あるものとして現世を生きるための指針を得ることにあり、そのためにキリスト教以前のギリシア・ローマの文化が探究された。文芸や思想面におけるこの動きを、**人文主義**(**ヒューマニズム** humanism)という。中世の西ヨーロッパでギリシア語は忘れられていたが、オスマン帝国の圧迫でビザンツ帝国から逃れた知識人によって伝えられた。**ペトラルカ** Petrarca 1304～74 や**ボッカチオ** Boccaccio 1313～75 をはじめとする人文主義者たちは、ギリシア語を学びつつ、さらに信仰と学問の言語として存続していたラテン語の知識を用いて、ヨーロッパ各地の修道院に死蔵されていた文献を解読し、古代のいきいきとした人間の姿を復活させた❷。

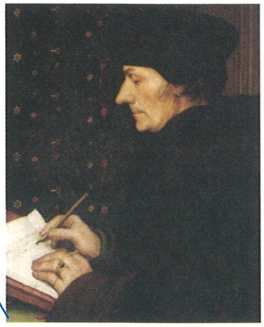
ルネサンスの探究は物質面にも向けられ、自然の隠された性質を解明しようとする動機のもと、中世以来の占星術や錬金術にもとづいてルネサンス期の科学が展開された。占星術は天文学の発達を導いて、宇宙の全体的秩序の一部をなすものとして天体の動きが観測された結果、**トスカネリ** Toscanelli 1397～1482 によって**地球球体説**が、さらに**コペルニクス** Copernicus 1473～1543 によって**地動説**がとなえられ、人々の世界観に大きな影響を与えた。錬金術は金属技術の発達をもたらし、後世の化学の基礎ともなった。この時期には、はじめて人体の解剖図も登場し、古代ギリシア以来の医学の権威がゆらぐとともに、人体が理想化されて描かれるようになった。

❷その成果の1つに、ホメロス(→p.72)の再発見がある。また人文主義者は、写本の文言の検討によって文章の真偽を確認する手法を確立し、これはのちのヨーロッパにおける古典学・聖書学・歴史学の礎となった。古典学の発達の結果、古代ギリシアの文明をヨーロッパ文明の源流とする観念も成立した。



「解剖手稿」 レオナルド＝ダ＝ヴィンチが残した人体の素描集。

1633年ガリレイ(ガリレオ＝ガリレイ)はコペルニクスの地動説を擁護したため異端とされ、宗教裁判にかけられて自説の放棄を迫られた。



エラスムス　ネーデルラントの人文主義者エラスムスはヨーロッパ各地を旅し、イギリスのモアとも親交を結んだ。

ドイツの画家ホルバインによって描かれた肖像画

ルネサンスの広がり

Q 多方面におけるルネサンスの成果は、後世にどのような影響を与えたのだろうか。

ルネサンスの精神のもと、その活動は様々な方面で展開された。建築では、古代建築の要素を取り入れて、均整と調和を重視する**ルネサンス様式**が成立し、建築はすべての学問を統合する最高の科学として称揚された。絵画では、油絵の技法が遠近法を用いて確立されて、近代絵画の基本である写実主義への道が開かれ、またキリスト教以外の主題も描かれるようになった。

ルネサンス期には、一連の重要な発明もなされた。中国伝来の**火器**→p.143が改良され、鉄砲や大砲が発明された。また、これは従来の戦術を一変させ、騎士の没落をもたらした(**軍事革命**)。中国から伝わった**羅針盤**→p.143も、天体観測に頼っていた航海術を大きくかえて、ヨーロッパ人の海洋進出を可能とした。さらに、**グーテンベルク**(Gutenberg 1400頃～68)による**活版印刷術**の改良と紙の普及によって可能となった大量の印刷物が、文芸の振興をあと押しし、その後の宗教改革の一助ともなった→p.180。

ラテン語ではなく、のちのイタリア語となるトスカナ語で著された。

人文主義のもとで、文芸でも豊かな成果が生み出された。**ダンテ**(Dante 1265～1321)による『神曲』が先駆となったように、ルネサンス期の文芸作品の多くは、ギリシア・ローマを模範としつつも、ラテン語ではなく各国語で著され、のちの国民文化の形成に貢献した。人文主義者を代表する**エラスムス**(Erasmus 1469頃～1536)は、人間はおろかしくとも幸福に生きていけるとし、謹厳さを誇る聖職者や学者を揶揄した。その友人の**モア**(More 1478～1535)は『ユートピア』を著して、キリスト教の天国とは別の理想郷の可能性を示した。この時代には、人間の感情や肉体的欲求も肯定されるようになった。**ラブレー**(Rabelais 1494頃～1553頃)はほら話と猥雑な記述で、笑いを人間の本性の1つとして復権させようとし❶、**シェークスピア**(Shakespeare 1564～1616)は人間の情念を歴史劇で描き出した。また、**セルバンテス**(Cervantes 1547～1616)は『ドン＝キホーテ』で、中世の騎士道を風刺した→p.136。

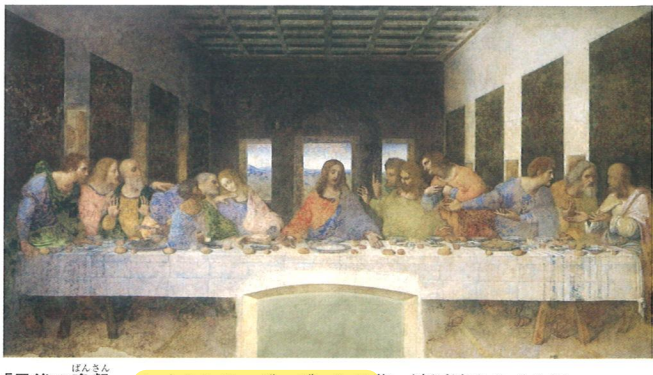
❶中世のヨーロッパでは、庶民のあいだを除いて、声を立てて笑うことは忌避されていた。



活版印刷所　親方(→p.122)のもとで、植字工が文字を拾い、奥の一人が活字にインクをつけ、もう一人が印刷機で印刷した。活版印刷術は東アジアで発明されたもの(→p.143)だが、アルファベットは漢字と比べて活字をつくりやすかったため、ヨーロッパでは各地へ急速に広まった。



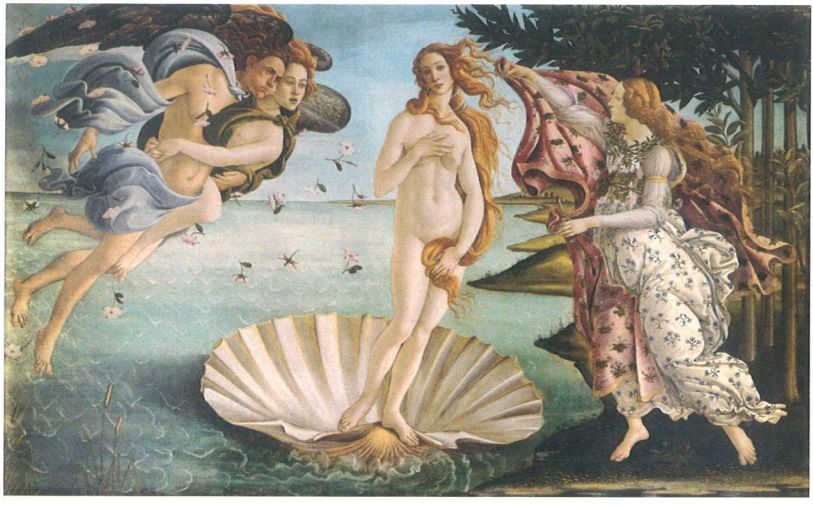
「農民の踊り」 フランドルの民衆生活を描いたブリューゲル(1525頃～69)晩年の作品の１つ。彼は「農民画家」とも呼ばれ、キリスト教とは異なる主題を数多く描いた。



「最後の晩餐」 レオナルド＝ダ＝ヴィンチ作。遠近法をたくみに利用した作品として有名である。



「ダヴィデ像」 ミケランジェロ(1475～1564)の彫刻作品の代表作の１つ。1504年完成。フィレンツェの市庁舎前におかれた。高さ5.17m。



「ヴィーナスの誕生」 イタリアのフィレンツェで活躍したボッティチェリ(1444頃～1510)の代表作の１つ。メディチ家のために描かれたともいわれる。

ルネサンス期の文芸と美術　伊＝イタリア　英＝イギリス　仏＝フランス　西＝スペイン　独＝ドイツ

【文芸】

- ダンテ(伊)…『神曲』
- ペトラルカ(伊)…『叙情詩集』
- ボッカチオ(伊)…『デカメロン』
- チョーサー(英)…『カンタベリ物語』
- エラスムス(ネーデルラント)…『愚神礼賛』
- モア(英)…『ユートピア』
- ラブレー(仏)…『ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語』
- モンテーニュ(仏)…『エセー(随想録)』
- セルバンテス(西)…『ドン＝キホーテ』
- シェークスピア(英)…『ヴェニスの商人』『ハムレット』

【美術】　フランドル派

- ジョット(伊)…「聖フランチェスコの生涯」
- ファン＝アイク兄弟(ネーデルラント)…ガン(ヘント)の祭壇画
- ドナテルロ(伊)…「聖ジョルジオ像」
- ブルネレスキ(伊)…サンタ＝マリア大聖堂ドーム
- ブラマンテ(伊)…サン＝ピエトロ大聖堂
- ボッティチェリ(伊)…「ヴィーナスの誕生」「春」
- レオナルド＝ダ＝ヴィンチ(伊)…「最後の晩餐」「モナ＝リザ」
- デューラー(独)…自画像、「四人の使徒」
- ミケランジェロ(伊)…「ダヴィデ像」「最後の審判」
- ラファエロ(伊)…聖母子像、「アテネの学堂」
- ブリューゲル(ネーデルラント)…「農民の踊り」

ルネサンス期の美術



サン＝ピエトロ大聖堂　現在のヴァチカン市国にあるカトリック教会の総本山。16～17世紀にかけて改築され、ブラマンテやラファエロ、ミケランジェロらが聖堂の設計に参加した。

2 宗教改革

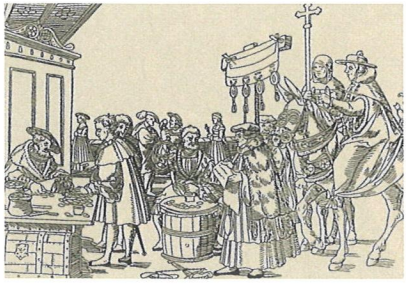
Q 16～17世紀におけるヨーロッパの宗教分布は、どのようなものだったのだろうか。

宗教改革とルター

Q それまで挫折続きだった教会改革の試みが、なぜ16世紀にはじめて実現したのだろうか。

西欧中世末期のカトリック圏では、聖職者の贅沢や怠惰がめだった一方で、疫病や戦争による社会不安から一般信徒の信仰心は高まり、教会の改革を求める声が続いていた。ローマ教皇は14～15世紀に生じた改革の動きを異端として処断し、カトリック圏の一体性を保ったが、16世紀の運動は異端にとどめることができず、**宗教改革**が始まった。

→p.128



贖宥状の販売　説教師は「お金が箱のなかに投げ入れられる音とともに、魂は救われる」と宣伝して利益を得た。

16世紀初めにメディチ家出身の教皇は、サン＝ピエトロ大聖堂をルネサンス様式に改築する資金を得るために**レオ10世**は**贖宥状**を売り出した。教会によれば、人は生まれながらに罪を負った存在だが、教会に属して儀式を受け、善行を積むことで神に赦されて魂が救われるのであり、贖宥状の購入も善行の１つとされた。贖宥状に対してドイツの修道士**ルター**（Luther 1483～1546）は、1517年に「**九十五カ条の論題**」で異議をとなえ、大きな反響を呼んだ。つづいてルターは、人は信仰を通して神に救われるのであり、真の信仰は、教会による導きではなく、信徒がみずから聖書を読むことで得られると主張した。また、修道院を否定したうえ、特別な人間とされてきた聖職者と一般信徒との区別を廃して（**万人司祭主義**）、聖職者は信徒によって選ばれるものとし、妻帯も許されるとした。



ルター

ルターの主張はカトリック教会を根本的に否定するものだったため、彼は教皇によって破門された。しかし、当時のドイツでは聖職者への不満とローマ教会への反感が高まっていたため❶、広範な社会層が彼を支持した。また、カトリック教会の守護者を自認していた神聖ローマ皇帝の**カール５世**（Karl V 在位1519～56）は、東方からせまるオスマン帝国との戦いに力を注がねばならず、帝国内の反皇帝勢力に強い姿勢でのぞむことができなかった。こうした事情のため、ルターは皇帝から説の撤回を求められたが、反皇帝派の諸侯に保護されて、思索と著述を続けることができた。

→p.122

→p.162

ザクセン選帝侯の保護のもとで、「新約聖書」のドイツ語訳を完成させた。

1521年に、ルターは皇帝からヴォルムスの帝国議会に呼び出された。

❶ドイツは政治的に分裂していたため、教皇による政治的干渉や財政上の搾取を受けやすく、「ローマの牝牛」とも呼ばれた。

ルターの「九十五カ条の論題」(1517年)と『キリスト者の自由』(1520年)

「九十五カ条の論題」

第6条　教皇は神によって赦宥がなされていることを宣し、かつ確認する場合、あるいは、確かに、自分に権限が与えられている事柄について赦宥をおこなっている場合を除いて、いかなる罪をも赦すことはできず、それらのことが無視されるならば、さらに罪は続くであろう。

第27条　彼らは人に説教して、金銭が箱に投げ入れられて、音がするならば、霊魂は〔煉獄から〕飛び逃げる、と言っている。

第82条　もし、教皇が教会を建てるというような瑣末な理由で、いとも汚らわしい金銭を集めるため、無数の霊魂を救うのならば、なぜ、あらゆることのうち、もっとも正しい目的である、いとも聖なる慈愛と霊魂の大なる必要のために、煉獄から〔霊魂を〕救い出さないのであろうか。

『キリスト者の自由』

第4条　体をとおし、体においていつでもおこなわれうるような良いおこないを全てなすといっても、そのようなことは、魂にとって何の助けにもならない。

第5条　魂が神の言葉をもっているなら、もはやほかのどんなものも必要としない。

第6条　神の言葉とは、福音書の中にあるような、キリストによってなされた説教にほかならない。

(著者訳)

Q▸ これらの著作では、どのような信仰が誤りで、また正しいとされているだろうか。

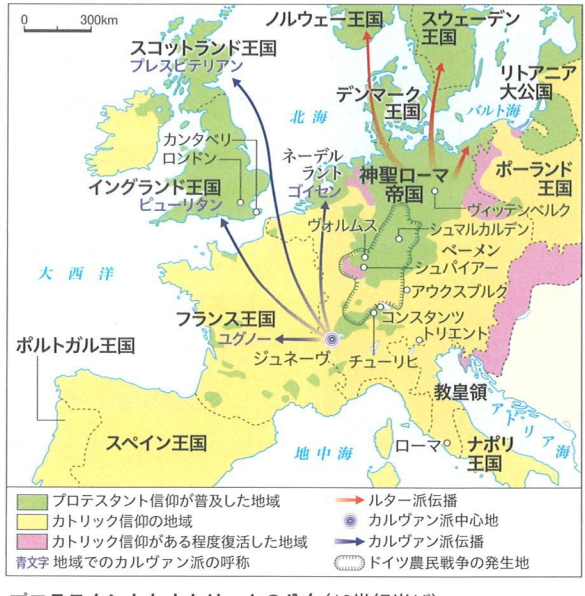
ドイツの印刷術(→p.178)もルターの改革をあと押しした。とくにルターが『新約聖書』のドイツ語訳を完成させたことで、彼の説は急速に広まった❷。その影響のなか、ドイツの農民は、ルター派の説教師ミュンツァー(Müntzer 1490頃～1525)を指導者に大規模な一揆をおこし、聖書に根拠が示されていないとして、農奴制(→p.101)の廃止を掲げるまでに急進化した(ドイツ農民戦争 1524～25)。しかしルターは、農民が現世の利益のみを求めているとして一揆に反対し、また諸侯は領主としての立場から一揆を鎮圧した。

その一方、諸侯のうちのルター派は、修道院の解散などの反カトリック政策を領邦内で(→p.132)とりつつ、同盟を結んで皇帝に対抗した。このため同盟と皇帝のあいだで宗教内戦がおこったが、1555年のアウクスブルクの和議で終結した。和議では、諸侯は自身の領邦の宗教をカトリックかルター派のどちらかに定める権利を得て、さらにルター派となる場合は、領邦内の教会の首長となり、教皇から自立して教会を監督することになった(領邦教会制)❸。宗教改革はこうして追認され、カトリック圏の一体性は崩れた。またルター派は、ドイツ以外ではおもに北欧に広まった。

シュマルカルデン同盟
シュマルカルデン戦争

❷ルネサンス期の文学が各国語で記されたことや、プロテスタント地域で各国語の聖書がつくられたことにより、ヨーロッパの識字率は向上した。

❸領邦の臣民は君主の信仰に従うこととされ、万人司祭主義は崩れた。



プロテスタントとカトリックの分布(16世紀半ば)

※1 カルヴァン派は、フランスではユグノー、ネーデルラントではゴイセン、スコットランドではプレスビテリアン、イギリスではピューリタンと呼ばれた。

❶「プロテスタント」の呼称は、16世紀前半に皇帝がいったんは認めていた信教の自由を取り消したことに対して、ルター派の諸侯が「抗議文」を出したことに由来する。

❷人はその区別を知り得ないが、堕落した人間が神に選ばれるはずはないため、規律と勤勉が救済の前提条件とされた。他方、カトリックの教えでは、職業上の成功や出世は重視されず、また利益は慈善として社会に還元すべきとされていた。

❸ヘンリ8世はさらに国内の修道院を解散させ、その広大な土地を没収した。

❹この改革は対抗宗教改革とも呼ばれる。

❺これに対して、プロテスタント諸派は聖像や聖画を重視せず、宗教改革が実現した地域では、それらが破壊されることも多かった。



ヘンリ8世　男児を欲したヘンリは、離婚と再婚を認めなかった教皇と決別したが、信仰面ではカトリックを維持した。

カルヴァンと宗教改革の広がり

Q カルヴァンの教えには、どのような特徴があったのだろうか。

16世紀にはドイツ以外でも宗教改革が試みられ、これらの人々はルター派とあわせてプロテスタント(Protestant)と総称されるようになった❶。スイスでは、ルターの影響を受けたツヴィングリ(Zwingli 1484～1531)が、チューリヒで聖書にもとづいた信仰を説き、彼の教えはほかの都市にも広まった。さらにフランス出身の神学者カルヴァン(Calvin 1509～64)がジュネーヴで指導をおこない、信仰のあつい信徒を長老に選出して牧師と共同で教会を運営する教会制度(**長老主義**)を確立した。教義においては、カルヴァンは聖書を重視して聖人への崇敬を廃し、さらに神に救われるかどうかは、無力な人間の善行や信仰によるのではなく、あらかじめ神によって定められているとする**予定説**をとなえた❷。こうしたカルヴァンの教会制度と教義は、商工業者や知識人の心をとらえ、フランスやネーデルラント、イギリスなどに伝わった。※1 また西ヨーロッパ各地の宗教改革運動は、カルヴァン派の判断を仰ぐことも多く、ジュネーヴはプロテスタントの中心地となった。

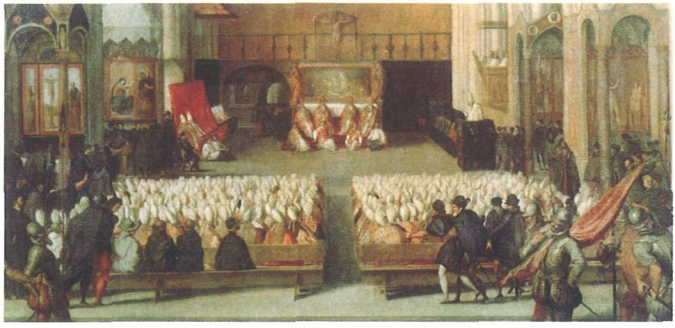
イギリスでは、国王ヘンリ8世(Henry VIII 在位1509～47)が宗教改革を主導した。彼は、王位継承問題で教皇と対立すると、**首長法**(1534年)を定めてカトリック圏を離脱し、これにより国王を首長とするイギリス国教会が成立した❸。その後、教義面の改革が進められ、エリザベス1世(Elizabeth I 在位1558～1603)が**統一法**(1559年)を制定してイギリスはプロテスタント国家となった。ただし、イギリスの宗教改革では、制度や儀式にカトリック的な要素を残したため、のちにピューリタン(Puritans)と呼ばれるグループが、改革の徹底化を求めることとなった。→p.191

カトリック改革とヨーロッパの宗教対立

Q カトリック改革には、どのような世界史的な意義があるのだろうか。

同じ頃、カトリック教会側でも独自の改革(**カトリック改革**❹)が始まっており、宗教改革への対応がその動きを強めた。1545年からは**トリエント公会議**が開かれ、ラテン語聖書の正統性のほか、善行や儀式の意義、聖像の使用❺、聖母や聖人への崇敬など、旧来のカトリック教義が再確認された。他方で教会規律については、贖宥状の販売は禁じられ、また聖職者の腐敗や怠慢への対策がたてられた。こうしたカトリック教会の自己改革の動きは、文化面では動的で豪華な表現を特徴とするバロック(Baroque)

ヘンリ8世の次のメアリ1世はカトリックの復活を図った。



トリエント公会議(上)　イタリアのトレント(ドイツ語でトリエント)で開かれた公会議は3つの会期にわたり、1563年まで続いた。この後、約300年間にわたって公会議は開かれなかったため、この公会議は近世・近代のカトリックの方向性を定める重要な機会となった。



バロック様式(右)　改革を背景に、バロック様式は民衆の信仰心に訴えるためにわかりやすい題材を用いた。図は、ザビエルが奇蹟をおこす様子をルーベンスが描いた「聖フランシスコ＝ザビエルの奇蹟」(1617～18年)。背景では、異教に対するキリスト教の攻撃も描かれている。

様式❻を生み出す要因の1つとなったが、教会は禁書目録を定め、宗教裁判を強化するなど、知の弾圧者となった側面もあった。

カトリック改革のうち、もっとも影響力をもったのが、イグナティウス＝ロヨラ(Ignatius Loyola 1491頃～1556)やザビエル(Xavier 1506頃～52)らが結成したイエズス会(Jesus)の活動であった。イエズス会は、ほかの修道会とは異なり、慈善活動よりも布教と教育に主眼をおいた。→p.133イエズス会士が、厳格な規律と強い使命感のもとに各地で積極的に活動した結果、南欧へのプロテスタントの浸透は阻止され、また南ドイツや東欧ではカトリックの復活もみられた。さらにイエズス会は、ヨーロッパの海外進出と連携して、中南米をはじめインドや中国、日本などアジア諸地域でも布教をおこなった。こうした動きにほかの修道会もならったため、ヨーロッパ外へのキリスト教の浸透は、イギリスから北米大陸への移民や布教を除くと、18世紀まではおもにカトリックによって進められた。

宗教改革の結果、西欧のキリスト教世界は分裂した。カトリック・プロテスタント両信徒の信仰心は強まり、16～17世紀には双方のあいだに迫害や宗教による内戦といった対立が生じた。また、こうした社会的緊張の高まりのなかで、ドイツなどのように「魔女狩り」が盛んにおこなわれた地域もあった❼。

❻バロック画家の代表としては、ベラスケス(1599～1660)やルーベンス(1577～1640)らが活躍した。

❼中世のヨーロッパでは、占いや治療をおこなうものとして魔術使いは容認されていたが、近世には迫害の対象となり、数万の人々が殺された。その大半は女性であった。



ザビエル　スペインの貴族の子に生まれ、パリに留学し、ロヨラらとともにイエズス会を結成した。1542年インドのゴアに到着し、49年には日本にも来航した。最後は中国での布教を志すなか、同地で死亡した。

3 主権国家体制の成立

Q▸ ヨーロッパの主権国家体制と戦争は、どのように関連していたのだろうか。

イタリア戦争は、1559年のカトー=カンブレジ条約で終結した。

イタリア戦争と主権国家体制

Q▸ 主権国家体制は、どのような経緯で成立したのだろうか。

15世紀半ば以降の西ヨーロッパ諸国は、東方のオスマン帝国に脅威を感じる一方で❶、海洋に進出したほか、ヨーロッパ内でもそれぞれの勢力拡大につとめた。その顕著な例がイタリア戦争（1494～1559）である。この戦争は、フランス国王シャルル8世が領土拡大をめざしてイタリアに侵入し、これに神聖ローマ皇帝が対抗したことで始まった。この後もイタリアは、両国の勢力争いの場となって断続的に戦争に巻き込まれたため荒廃し❷、諸国家の分断状況が固定された。こうした激動の渦中にあって、マキァヴェリ（Machiavelli 1469～1527）は『君主論』を著して、統治においては人間の徳性に期待するのではなく、権力と利益を基本原理とすべきとして、政治学を刷新した。

イタリア戦争期のヨーロッパを主導したのが、神聖ローマ皇帝カール5世（スペイン王カルロス1世 Carlos I 在位1516～56）（→p.180）である。ハプスブルク家出身の彼は、相続によって当時の西ヨーロッパの約半分を領土とし、古代以来の単一の

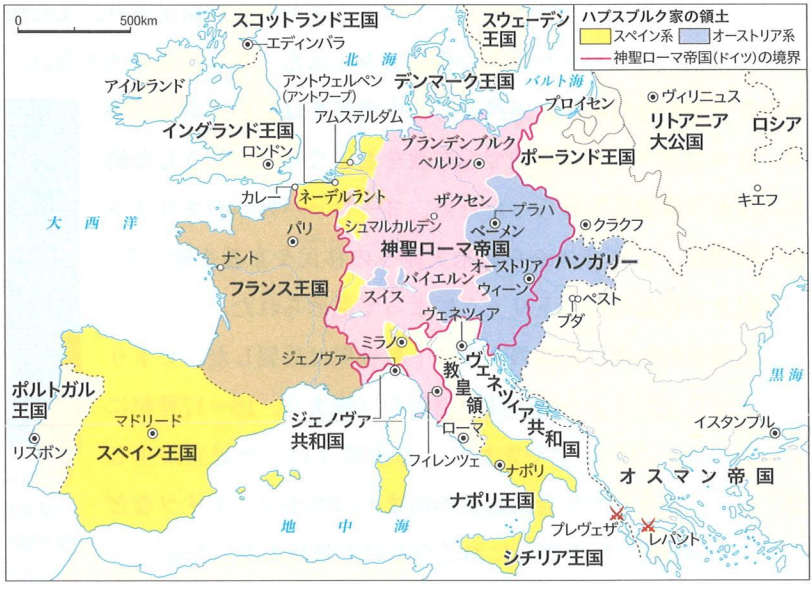
→p.158

❶オスマン帝国のヨーロッパに対する優位は、「トルコの脅威」と呼ばれ、17世紀末まで続いた。

❷この結果、絶頂期にあったイタリアにおけるルネサンス（→p.176）は終焉に向かった。



カール5世　ハプスブルク家出身、かつ母がスペイン王女であったため、皇帝に選出されるとスペイン・ドイツにまたがる大帝国を実現し、君主としての称号は合計で71に達した。



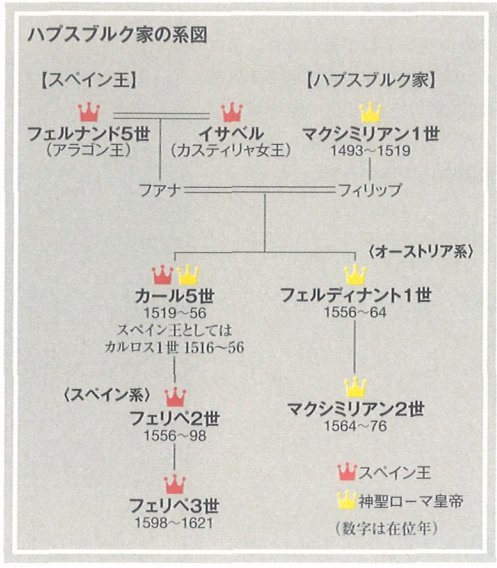
16世紀半ばのヨーロッパ

ヨーロッパ帝国の再興をめざした。しかし、オスマン帝国との戦いが重い負担となり、さらに宗教改革によって神聖ローマ帝国内の領邦国家の自立傾向が強まったため、その構想は潰え、彼は領土を長男と弟に二分して退位した❸。

その後のヨーロッパでは、個々の国家をこえた権力が成立することはなく、様々な規模・政治体制の国家が、形式上は対等な立場で国際社会を形成した。そこでは各国が激しい勢力争いを繰り広げたため、戦争が頻発した。そのため各国は、国境を画定しながら、統治体制・機構を改編し中央に権力を集中させて住民への統制を強めるなど、国家としてのまとまりを追求した❹。こうした国家を**主権国家**、またそれが織りなす国際秩序を**主権国家体制**と呼び、これは16世紀半ばから17世紀半ばにかけて成立した。

この時代の主権国家の典型例が、**絶対王政**❺である。近世ヨーロッパ各国の王権は、貴族をはじめとする諸身分の特権を抑制しつつ、地方の独立性を弱めて中央の統制下におき、さらに議会の活動を制限するなどして中央集権化を進めた❻。その結果、国王が定住し、行政機能を集中させた首都が各国に成立して、宮廷や華やかな**宮廷文化**も生まれた。また、**常備軍**や、国王の任命により中央から地方へ派遣される**官僚**が、統治の新たな柱となった。

主権国家体制は、原則上は諸国家の分立状態を意味したが、近世のヨーロッパにはいくつかの強国が現れて、他国に優越する覇権の立場を獲得した。すなわち16世紀後半のスペイン、17世紀半ばのオランダと同世紀末のフランス、18世紀後半のイギリスである。



❸これによってハプスブルク家はオーストリア系とスペイン系にわかれた。

❹その柱の1つが、戦費を捻出するための徴税機構の強化であり、多くの国で財政改革がおこなわれた。

❺絶対王政の一方、独立後のオランダ・スイスは共和国となり（→p.188）、ジェノヴァやヴェネツィアも中世以来の共和政を維持したように、ヨーロッパでは小規模の共和国も併存した。

❻このため中世までとは異なり、近世のヨーロッパでは国王の暗殺や廃位は例外的なできごととなった。

ヨーロッパ諸国の動向

16世紀後半のスペイン・イギリス・フランスはどのような関係にあったのだろうか。

スペインは、カール5世の長男**フェリペ2世**（Felipe II 在位1556～98）の時代に最盛期を迎えた。フェリペはネーデルラント・南イタリアも継承し、加えて王朝が断絶した**ポルトガル**の王位も兼ねて、広大な植民地を含む「太陽の沈まぬ帝国」（→p.190地図）を手中にした。さらに**フランスと講和してイタリア戦争を終結させる**一**カトー＝カンブレジ条約**



レパントの海戦　1571年にギリシアのレパント沖で戦われた。スペイン側もオスマン帝国側もそれぞれ200隻以上のガレー船を擁していたが、損害は圧倒的にオスマン帝国側に大きかった。

方、1571年にオスマン帝国の海軍を**レパントの海戦**で破り、西地中海へのイスラーム勢力の浸透を阻止した。またカトリックの盟主を自認して、イエズス会を支持しつつ、異端審問によってプロテスタントを弾圧した。

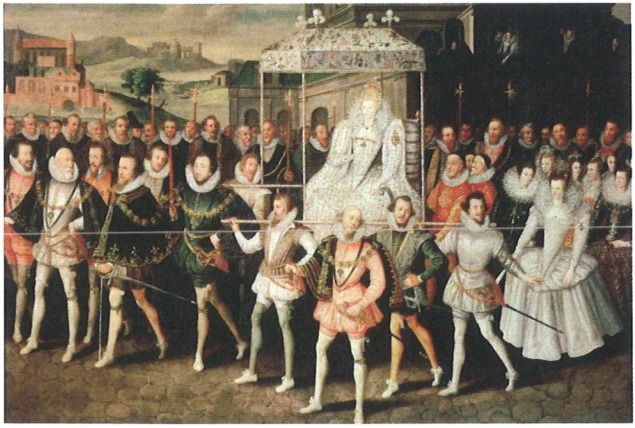
しかし、イタリア戦争の講和によってフランスとのあいだの人の移動が自由になり、スペイン領ネーデルラントにカルヴァン派が広まると、彼らはフェリペのカトリック化政策に反発した。さらに従来の自治特権をフェリペに奪われた在地貴族の反抗が加わって、反乱へと展開した。南部(のちのベルギー)はフェリペとの協調路線に転じたが、北部の**オランダ**は**オラニエ公ウィレム**(Willem van Oranje 1533～84)→p.222の指導のもと、スペインに敵対する諸国の援助を受けて抵抗を続け❶、1581年に独立を宣言した。スペインは豊かなこの地の独立を承認しなかったため戦争は長期化したが、財政難もあって1609年の休戦で事実上の独立を認めた(**オランダ独立戦争**1568～1609)。つづいてスペインはポルトガルとの同君連合も解消されたため、17世紀にその国力は急速に衰退していった。

オランダ独立戦争を支援した国の1つが、**エリザベス1世**→p.182率いるイギリスであった。オランダでの戦況の打開をはかったフェリペは、イギリス侵攻をめざして1588年に**無敵艦隊**(Invincible Armada **アルマダ**)を派遣したが、イギリス海軍はこれを撃退した❷。

❶ネーデルラント各州は、軍事同盟(**ユトレヒト同盟**)を結んでスペイン軍と対峙した。同盟の条文は、独立後のオランダの基本法に取り入れられた。

❷この海戦で活躍した軍人たちは、国王から特許を得て、スペインの中南米植民地やそこから銀を運ぶ船を襲う海賊としても活動していた。

エリザベス1世(中央の輿に乗る人物)　エリザベスは、「臣民すべてが夫である」と称して敬愛される君主となったが、生涯独身をつらぬいたため、テューダー朝は断絶した。





サンバルテルミの虐殺　ユグノー戦争中の1572年、パリにおいて、カトリック側の政治家がユグノー側のリーダーのみの暗殺を計画したが、民衆による無差別な虐殺(ぎゃくさつ)がおこり、多数のユグノーが殺害された。

イギリスでは、ジェントリ(郷紳)という大地主の協力のもとで王権の強化が進んだ。16世紀には、地主が「囲い込み」を推進し、農地の牧場への転用が広がったことを背景に毛織物工業が国民産業へと発展した。

当時はイギリスも本格的な海外進出を始めており、北米大陸への植民を試みた❸ほか、国民的産業となっていた毛織物(けおりもの)製品の販路拡大やアジア物産を求めて、**東インド会社**(1600～1858)などの貿易特許会社を設立した。

同じ頃、フランスはスペインに匹敵する大国であり、フランス王家とその周囲の諸国家に君臨したハプスブルク家との争いは、近世におけるヨーロッパ国際政治における基調の１つであった。一方、16世紀後半には、**ユグノー**(Huguenot)と呼ばれたカルヴァン派の勢力拡大にともなって、国内各地でカトリックとの対立が深まり、**ユグノー戦争**(1562～98)と呼ばれる宗教内戦へと至った。長期にわたったこの内戦では、国王が暗殺されるなど王国の分解も危惧(きぐ)された。こうしたなか、ブルボン家の**アンリ４世**(Henri IV, 在位1589～1610)が即位して**ブルボン朝**(Bourbon, 1589～1792、1814～30)を開き、みずからカトリックに改宗する一方、**ナントの王令**(おうれい, 1598)を発してユグノーに信仰の自由を与えた。こうして、国内では信仰よりも平和と国家の安定を尊重する立場が主流となり、フランスの宗教対立には一応の終止符が打たれた。

❸最初の計画であるヴァージニア植民が失敗したのち、17世紀初めに建設されたジェームズタウンが、最初の永続的な植民地となった。

三十年戦争

Q アウクスブルクの和議とウェストファリア条約で異なる点は何だろうか。

16世紀ヨーロッパのもう１つの大国が神聖(しんせい)ローマ帝国であったが、その内部事情は中央集権化を困難としていた。アウクスブルクの和議以降も宗派対立が続き、また帝国の諸侯(しょこう)は、和議の宗教面で認められていた領邦(りょうほう)の主権(しゅけん)を政治面でも拡大しようとして、皇帝と対立していた。こうした二重の対立を背景として、**ベーメン**(ボヘミア)におけるプロテスタ

→p.181



三十年戦争　当時の軍隊は傭兵が主体で、整然とした隊列にみられるように戦場では表面上は華やかな姿をみせた。しかし、傭兵は民間人に対しては略奪や暴行の限りをつくした。

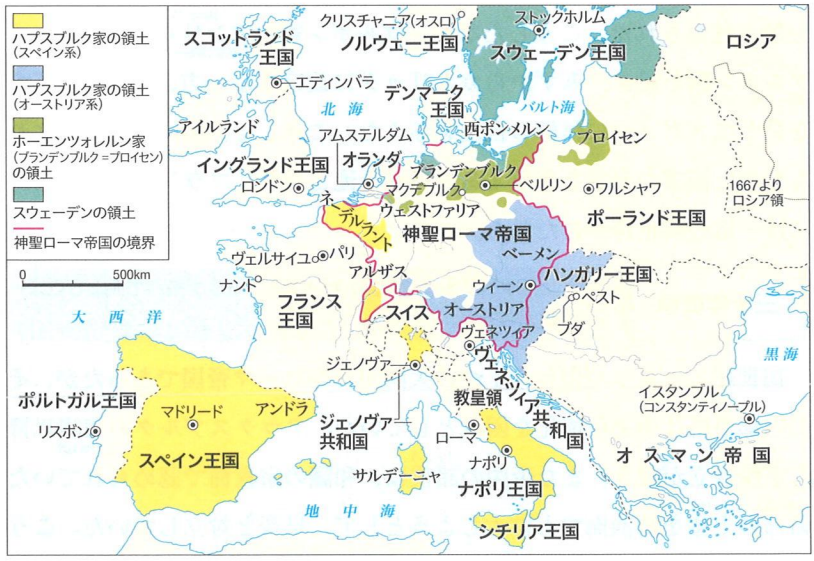
❶ベーメンは神聖ローマ帝国内の王国であり、皇帝が国王を兼ねることが通例であった。三十年戦争時の皇帝は、イエズス会の影響を受けて強いカトリック信仰をもっていた。

❷皇帝軍のヴァレンシュタイン(1583～1634)や、スウェーデン王グスタフ＝アドルフ(在位1611～32)らの有能な軍人の活躍もあって、戦線は帝国北部から南部まで広がった。

ント貴族の反乱をきっかけに、**三十年戦争**(1618～48年)が勃発した❶。この戦争では、バルト海地域での覇権をめざしたスウェーデンなど多くのプロテスタント国家に加えて、ハプスブルク家の勢力を削ごうとしたカトリックのフランスも、反皇帝側で参戦した❷。そのため、戦争は当初の宗教対立から国家間の争いへと拡大した。また、火器など軍事革命の技術が駆使されたため、主戦場となったドイツは甚大な被害をこうむった。→p.178

フランスはアルザスを獲得した

三十年戦争を終結させたのが、1648年のウェストファリア条約であった。この条約でオランダとスイスの独立が正式に認められたほか、神聖ローマ帝国でカルヴァン派が公認され、各諸侯の領邦国家には独自の外交権が認められた。これにより主権を拡大した領邦国家が絶対王政の確立に向かった一方で、帝国は国家としては形骸化した。こうして、多数の国が調印する国際条約というかたちで保障されたことで、主権国家体制が法的な裏付けを得て最終的に確立された。この体制のもと、17世紀後半に急速に台頭したのがオランダであった。→p.133



17世紀半ばのヨーロッパ

4 オランダ・イギリス・フランスの台頭

Q オランダ・イギリス・フランスがそれぞれもった有利な点は何だろうか。

オランダの繁栄と英仏の挑戦

Q 17世紀にオランダはなぜ経済的な覇権を築くことができ、また、なぜそれを失ったのだろうか。

ネーデルラントでは、16世紀後半にはすでに漁業や干拓農業の技術が発達し、毛織物業はヨーロッパ最高の水準に達していた。国際商業でも、東欧のバルト海沿岸地域から穀物を輸入し、かわりにヨーロッパ各地の産品を輸出する中継貿易で栄えた。北部のオランダ(ネーデルラント連邦共和国)は、独立後も首都**アムステルダム**を中心に造船・貿易・金融でヨーロッパをリードした❸。こうした経済的繁栄により、17世紀のオランダはヨーロッパでもっとも都市化が進み、貴族や教会だけでなく都市のブルジョワ(市民)も文化の保護者となった❹。また宗教と思想に寛大な雰囲気が広がり、学問や出版でもヨーロッパの中心となった。

アントウェルペンにかわって国際金融の中心になった

オランダは、**東インド会社**(1602～1798)などの貿易特許会社をおもな担い手として、カリブ海・アフリカ南部(ケープ植民地)・アジアなどに進出した。アジアではポルトガルの海上交易網を破壊し❺、**アンボイナ事件**(1623)❻でイギリスを東南アジアから駆逐して、ジャワ島の**バタヴィア**(のちのジャカルタ)(→p.173)を拠点に香辛料交易を独占した。また日本との交易を維持し(→p.172)、大量の銀をもちだした。さらに北米大陸にも進出して、ニューアムステルダムを中心とする植民地を建設した。

しかし、オランダが海洋大国となると、イギリス・フランスか

❸17世紀半ばには、ヨーロッパの船舶の大半はオランダ製となり、またオランダが所有する船舶の数は、イギリスの3倍に達した。

❹**レンブラント**(1606～69)らの画家は、市民からも依頼を受けて絵画を制作した。

❺以後ポルトガルは、ブラジルの開発と、ブラジルを中心とする大西洋での海上交易に注力した。

❻インドネシアのアンボイナ(アンボン)島において、日本人を含む多数のイギリス商館員らをオランダ人が殺害した事件。

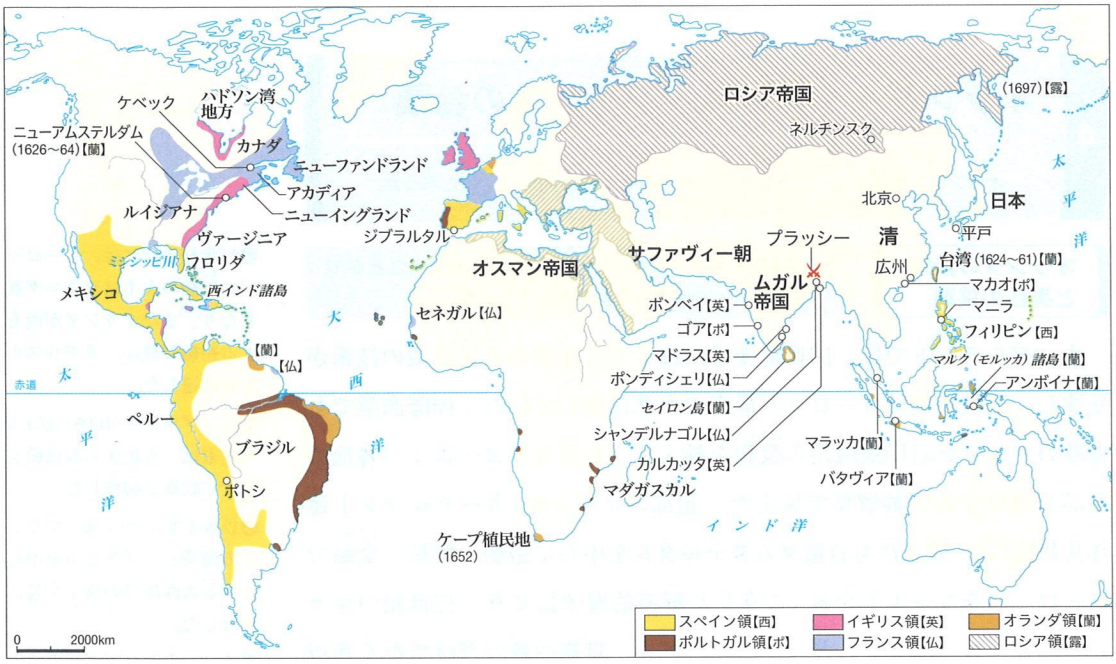
オランダ画派の代表的な画家



オランダ東インド会社の皿(上)　東インド会社は、貿易だけでなく軍事行動や植民活動の権限も与えられた。写真は中国の陶磁器を模して日本でつくられたもの。中央に同社を示す「VOC」マークがある。



「アムステルダム織物業者組合の幹部たち」(左)　レンブラント作。複数の人物を主題にした肖像画。アムステルダムの商工業者の堅実で生真面目な様子がうかがえる。



17世紀半ばのヨーロッパ諸国の植民地

ら挑戦を受けた。両国はオランダの自由貿易を妨害する経済政策をとるとともに、イギリスは17世紀後半のイギリス＝オランダ(英蘭)戦争でニューアムステルダムを奪い❶、フランスは侵略戦争によって一時はオランダ本土の半分を占領した。この危機は統領オラニエ公ウィレム3世(Willem III 在位1672～1702)の指導で乗り切ったが、フランスの脅威は続いたため、ウィレムはイギリスの名誉革命によって同国国王ともなり、イギリス＝オランダ同君連合を築いて対抗した。ウィレムの死後に同君連合は解消されたが、18世紀にもオランダは、フランスとの対抗上、イギリスとの同盟関係を維持した。しかし、この同盟には自国の海軍力と貿易を制限する協定があったため、オランダの国力は衰退しはじめた。

❶ニューアムステルダムはニューヨークと改称され、のち北アメリカの中心都市に成長した。

イギリスの2つの革命

Q イギリスの1640年代の革命が、他国からの干渉を受けなかったのはなぜだろうか。

エリザベス1世死去後のイギリスは、スコットランドから国王(ジェームズ1世(James I 在位1603～25))を迎え、両国は同君連合を形成した(ステュアート朝(Stuart 1603～49、1660～1714))。イギリスでは中世以来、国王の統治に議会の同意が必要だった。しかし、国王チャールズ1世(Charles I 在位1625～49)は、王権神授説❷を奉じて絶対君主として統治したため、議会と対立した。議会は権利の請願(1628)を発して国王権力の縮小を要求したが、国王は議会を解散し、以後11年間にわたって議会を開かなかっ

→p.186
→p.129

❷国王の権力は神に直接由来し、人民はもちろん、神聖ローマ皇帝やローマ教皇からも干渉されないとする理論。16世紀末にとなえられ、成立期の絶対王政を支えた。

1630年代末におこったスコットランドの反乱を鎮圧する戦費調達をするため

た。1640年、国王が課税のために再び議会を招集すると、議会は逆に国王の権力の制約を決議した。国王が強硬手段で議会をおさえ込もうとしたため、42年に内戦が始まった。この内戦は革命となったが、王党(宮廷)派に対峙した議会(地方)派のなかに、国王によって信仰を迫害されていたピューリタンが多かったため、**ピューリタン革命**とも呼ばれる。

イギリス革命の発端

→p.182

議会派は、**クロムウェル**(Cromwell 1599～1658)の指導のもとで王党派に勝利し❸、裁判を経て1649年に国王を処刑して、**共和政**を開始した。また、国教会体制も大きく変更された。こうした動乱のさなか、思想家**ホッブズ**(Hobbes 1588～1679)は『リヴァイアサン』を著して、無政府状態の混乱を防ぐためには絶対的な権力も正当化されると説いて、主権国家を王権神授説とは異なるかたちで論じた。

→p.185

共和政期の重要な政策は、**重商主義**❹にもとづいてオランダの経済的覇権に対抗するために制定された**航海法**(1651)❺であり、これが3次にわたる**イギリス＝オランダ(英蘭)戦争**(1652～54, 65～67, 72～74)のきっかけとなり、さらにその後約2世紀にわたってイギリスの海外貿易の基本方針となった。一方、国内では共和政が安定しなかったため、クロムウェルは軍事独裁体制をしいた。しかし国民は彼の厳格な統治を嫌い、その没後にチャールズ1世の子を亡命先のフランスから国王(**チャールズ2世**(Charles II 在位1660～85))として迎えた(**王政復古**)。

※1

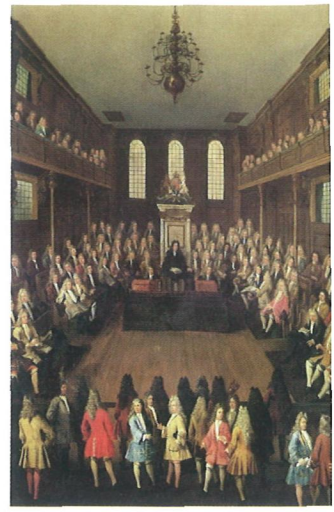
クロムウェルは1653年に終身の護国卿になった。

チャールズ2世は議会と国教会を革命前のかたちに戻した一方で、議会は革命の経験から、国教会の立場を強めようとした❻。しかし王位継承者のカトリック信仰が発覚したため、継承資格をめぐって激しい争いが生じた❼。カトリック信徒のまま即位した**ジェームズ2世**(James II 在位1685～88)は、議会の立法権を無視して統治をおこなった。また王は、フランスでプロテスタントを迫害していたルイ14世と親密な関係にあったことから、国民のあいだには、フランスへの従属とカトリック化への危機感が高まった。そこで1688年に、一部の政治指導者が王の娘婿のオラニエ公ウィレム3世をオランダからまねくと、ジェームズは国民の支持を失ってフランスに逃れた。翌89年、ウィレムは夫妻で即位し(**ウィリアム3世**(William III 在位1689～1702)・**メアリ2世**(Mary II 在位1689～94))、寛容法を定めてプロテスタント全般の信教の自由を保障しつつ、議会の要求を受け入れて**権利の章典**の制定に同意した。権利の章典は、立法や財政などにおいて議会の権限が国王の権力に優越することを宣言するものであり、ここにイギリスの立憲君主政が始まった(**名誉革命**)。この時

→p.192

※2

権利の宣言



イギリス議会の様子(18世紀)

❸またクロムウェルは、王党派と結んでいたアイルランドとスコットランドを征服し、アイルランドではカトリック勢力の土地を大規模に奪って、議会派の軍事費をまかなった。

❹特権会社を設立して産業の育成と貿易の振興をはかり、また高い関税を設定して貿易収支の黒字を拡大し税収を増大させるなど、国家の財政と軍事基盤を強化しようとする様々な政策の総称。

❺イギリスとその植民地に外国船を入れないこと、外国への輸出はイギリス船に限定することなどを規定し、オランダ船を排除しようとした。

❻また、議会は1679年に人身保護法を定め、国王による恣意的な逮捕を禁じ、人民の身柄の自由を保障した。同法は第二のマグナ＝カルタ(→p.128)とも呼ばれた。

❼この争いを契機に、王権を重んじるトーリ党と、議会を重んじるホイッグ党の2つの政治党派が生まれた。

※1 国家が経済に介入して自国を富ませる経済政策を重商主義といい、早い時期には金銀の獲得を目標とする重金主義が中心だったが、やがて輸入の抑制と輸出の促進を図る貿易差額主義に重点が移った。

※2 チャールズ2世は専制的な姿勢でカトリックを擁護したため議会と対立した。これに対して議会は官吏を国教徒に限定する審査法を制定した。

権利の章典(抜粋)

議会の上下両院は……この王国の……古来の権利と自由を守り明らかにするために、次のように宣言する。

1. 王の権限によって、議会の同意なく、法を停止できると主張する権力は、違法である。
4. 国王大権❶と称して、議会の承認なく、王の使用のために税金を課することは、違法である。
6. 議会の同意なく、平時に国内で常備軍を徴募し維持することは、法に反する。
8. 議員の選挙は自由でなければならない。
9. 議会での言論の自由、および討論・議事手続きについて、議会外のいかなる場でも弾劾されたり問題とされたりしてはならない。
13. あらゆる苦情の原因を正し、法を修正・強化・保持するために、議会は頻繁に開かれなければならない。

(著者訳)

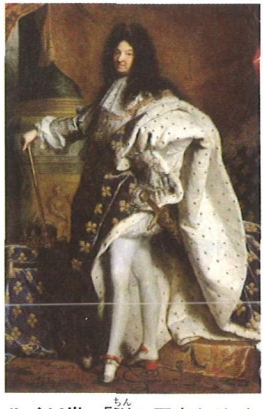
❶君主がもつとされた特別の権限。

Q 議会の権利として主張されたことは何だろうか。また、国王の権利としてどのようなものが残されたと考えられるだろうか。

❶この主張は、のちのアメリカ独立革命・フランス革命の理論的よりどころとなった。

❷グレートブリテンについても、「イギリス」の語を用いる。なおイギリスは、16世紀からアイルランド(→p.131)とも同君連合の関係にあった。

❸この政治体制は、その後各国の議会政治のモデルとなった。ただし、当時の有権者は成人男性の一部であり、議員も大半は貴族やジェントリ(→p.129)などの地主であった。



ルイ14世 「朕は国家なり」と称して、国政のすべてを指揮した。

期にロック(Locke 1632~1704)は『統治二論』を著し、国王の権力の根源は人民からの信託にあるとする社会契約説をとなえて、専制におちいった権力に対する人民の抵抗権を正当化した❶。

メアリ2世の妹であるアン女王の治世中。

オランダとの同君連合(→p.190)の解消後、1707年にイギリスはスコットランドと国家合同してグレートブリテン王国(Great Britain)❷を形成した。また14年に王朝がとだえると、血縁関係にもとづいてドイツから新王を迎えて、新たな同君連合を発足させた(ハノーヴァー朝 Hanover 1714~1901)。名誉革命後のイギリスは、議会と国王が権力を分有した点で近世でも例外的な政治体制をもった。さらに18世紀前半には、ホイッグ派議員のウォルポール(Walpole 在任1721~42)が首相となって、国王と議会の橋渡し役をつとめ、国政を指揮したが、世論と議会の信任を失うと後継首相にその座をゆずった。ここに、選挙と議決の結果を重視する**議院内閣制**(責任内閣制)がイギリスに確立した❸。

ステュアート朝

ジョージ1世が即位

※1

フランスの絶対王政

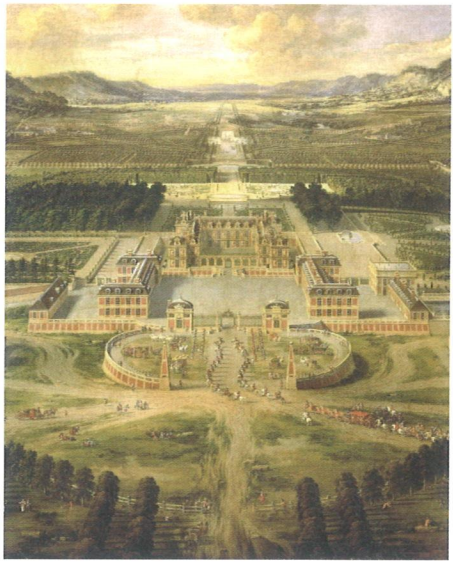
Q 近世フランスの強みと課題は、それぞれ何だろうか。

イギリスと対照的なかたちで近世に国家を発展させたのが、ブルボン朝(→p.187)下のフランスであった。17世紀初めのフランス最大の課題は、ユグノー戦争(→p.187)以来の宗教対立によって動揺した国王と政府の権威を確立することにあったため、国王ルイ13世(Louis XIII 在位1610~43)は宰相リシュリュー(Richelieu 1585~1642)とともに、城塞などの貴族の私的軍事力を解体し、官僚を全国に派遣して統治にあたらせた。また、王権への制約となっていた議会(全国三部会(→p.129))を停止した。フランスはこうして中央集権化を進める一方、外交面では三十年戦争(→p.188)に介入し、スペインと神聖ローマ帝国の両ハプスブルク家の勢力を抑えた。

しかし、ルイ14世(Louis XIV 在位1643~1715)が幼少で即位し、その治世の初期に国政を率いたマザラン(Mazarin 1602~61)が中央集権化をさらに進めると、自立性を失うことを恐れた貴

※1 イギリスの立憲議会政治は「王は君臨すれども統治せず」という表現で説明された。





ヴェルサイユ宮殿(右)と「鏡の間」(上)　フランス国王ルイ14世は、パリ近郊のヴェルサイユにバロック様式の壮大な宮殿を造営させた。「鏡の間」ではドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の即位式(1871年)(→p.231)や第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約の調印(1919年)(→p.284)などもおこなわれた。

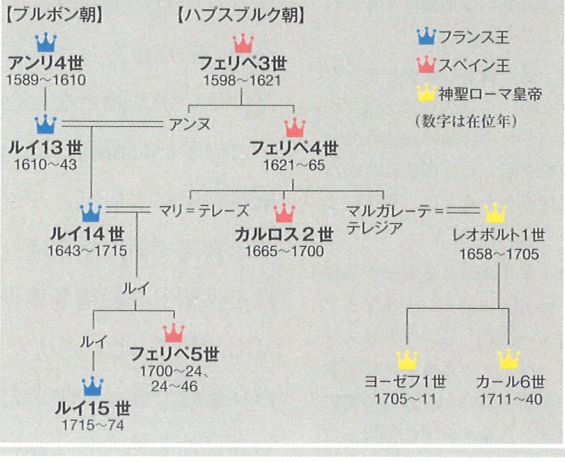
族や地方の不満が高まった。とくに1648年に貴族らがおこした反乱(**フロンドの乱** Fronde 1648~53)は激しく、イギリスの革命にも影響を受けて全国三部会の開催などを要求し、パリを占領したが、政府によって鎮圧された。その後、**ルイ**は半世紀以上にわたる親政を開始し、**王権神授説**を奉じて貴族への統制と官僚制を強化し、絶対王政をきわめた。「太陽王」と呼ばれた彼の名声はヨーロッパ全域におよび、造営した巨大な**ヴェルサイユ宮殿**は各国の宮殿・宮廷のモデルとされ、フランス語も外交・文化における国際語となった❹。

国王に重用されたボシュエが唱えた。

ルイは経済面では、**コルベール** Calbert 1619~83 を登用して積極的な**重商主義**政策を展開し、オランダに対抗した。また東インド会社を改革・国営化してインドに進出したほか、カナダなど北米大陸への植民を本格化し、西インド諸島のプランテーションも拡大した。一方、宗教政策では**ナントの王令**(→p.187)の**廃止**(1685年)によって、多数のユグノーの国外流出をまねいた。

ルイがもっとも力を注いだのが、王の威光を増す手段とみなした戦争であった。彼は常備軍を大幅に増強し、当時のフランス陸軍はヨーロッパで最大・最強となったが、これに脅威を覚えた諸国による共同の対抗

スペイン継承戦争前後のスペイン王とフランス王との関係



❹国内でも、王立学術機関のアカデミー＝フランセーズが定めた規範を受けて、フランス語文化が発達した。その代表が人文主義(→p.177)を継承した古典主義の戯曲であり、モリエール(1622~73)らがすぐれた作品を生んだ。古典主義は美術にも広まり、バロック様式(→p.183)にかわる文化の主流となった。

・17世紀前半、西インド会社を設立したオランダはアフリカとアメリカの通商に乗り出し、アメリカ東海岸にニューネーデルラント植民地を建設した。

・17世紀半ばのイギリス＝オランダ戦争中に、イギリスはニューネーデルラント植民地の中心都市ニューアムステルダムを占領し、ニューヨークと改称した。

策の一環が、ウィレム(ウィリアム)3世によるイギリスとオランダの同君連合であった。これを阻止できなかったルイは、直系がとだえたスペインとの同君連合を画策したが、これにオランダ・イギリス・神聖ローマ帝国が反対し、スペイン継承戦争(1701～14)が勃発した。この戦争の結果、ユトレヒト条約(1713)によって、スペインにブルボン家の王朝が成立したが、フランスとの同君連合化は認められず、また北米大陸の領土の一部をイギリスに割譲したため、フランスの覇権は失われた❶。一方でスペインは、本国以外のヨーロッパ領土をすべて失って大国の地位から転落し、その後も大西洋の制海権を奪われて植民地貿易の権益を侵食されていった。

→p.190

ルイ14世は孫のフェリペ5世にスペイン王位を継がせようとした。

→p.197地図

・スペイン継承戦争と並行して英仏両国が北米大陸で展開したアン女王戦争では、イギリスはフランスを圧倒し、1713年のユトレヒト条約でハドソン湾地方、アカディア、ニューファンドランドをフランスから獲得した。

❶スペイン継承戦争は、ユトレヒト条約の翌年に結ばれた講和条約によって完全に終結した。

・イギリスはアメリカ東海岸に最初の植民地であるヴァージニアを建設した。さらに1620年のピルグリム＝ファーザーズの上陸後はニューイングランド植民地が形成され、18世紀前半までに13植民地へ発展した。

・フランスはカナダにケベックを建設したのち、ルイ14世時代には広大なルイジアナを植民地とした。

イギリスとフランスの覇権争い

Q イギリスとフランスの覇権争いは、なぜグローバルな戦いになったのだろうか。

三十年戦争・スペイン継承戦争によって、ハプスブルク家・ブルボン家それぞれの覇権が失われたのち、18世紀の西ヨーロッパ国際政治は、島国の利点をもったイギリスと、最大の人口をもったフランスとのあいだの争いが基調となった❷。

→p.188

この争いに勝利して、覇権を握ったのはイギリスであった。スペイン継承戦争によって、ジブラルタルなどの地中海の要衝を獲得したほか、北米大陸で領土を広げ、さらにスペインの広大な中南米植民地に黒人奴隷を供給する特権も獲得して奴隷貿易をおこなった。つづいてイギリスは七年戦争(北アメリカではフレンチ＝インディアン戦争(1754～63))に勝利して、パリ条約(1763)によって北米大陸からフランス勢力を駆逐し、西インド諸島でも植民地を拡大した❸。またこの時期にイギリスは、インド東北部(ベンガル地方)において広大な植民地を獲得し❹、世界各地に広がる帝国を築いた(イギリス帝国)。

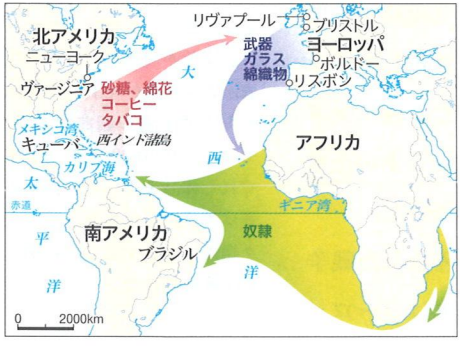
→p.198

イギリスはとくに大西洋地域に積極的に進出し、三角貿易を大規模に展開した。そこでは、武器や綿織物など本国の製品がアフリカに輸出され、そこで購入された黒人奴隷がカリブ海や北米大陸南部のプランテーションに送りこまれるとともに、砂糖やタバコなどプランテーションの産品が本国にもち帰られた。

❷この時期の両国の争いは、第2次英仏百年戦争と呼ばれることもある。

❸一連の戦争の費用をまかなうため、イングランド銀行が設立され、巨額の国債の発行業務を担った。国債は豊かな民間資金をもとに、税金によって支払われた。

❹イギリスはアンボイナ事件(→p.189)以降インドをアジア貿易の拠点とし、マドラス・ボンベイ・カルカッタに要塞や商館を築いた。同じ時期にフランスもインドに進出したため、両国の争いは七年戦争期まで続いた。



大西洋における三角貿易

5 北欧・東欧の動向

Q 北欧・東欧諸国では、それぞれどのような改革がなされたのだろうか。

ポーランドとスウェーデン

Q ポーランドとスウェーデンは、主権国家体制のなかでどのような位置を占めていたのだろうか。

近世の北欧・東欧諸国は、民族や宗派の異なる地域が同君連合によって結合した場合が多く、国家として不安定であった。またその多くが植民地をもたず、たがいの領土を奪い合ったので、諸国の興亡は西欧よりも激しかった。

ポーランドはリトアニアと同君連合を形成し、近世初頭の東欧の大国だった。→p.125 しかし、16世紀後半にヤゲウォ朝が絶えると貴族主体の選挙王政に移行し、西欧の絶対王政とは異なる政治体制をとった。また、同世紀末に即位した国王はイエズス会の支持者であり、周辺地域のカトリック化に乗り出したが、スウェーデンでルター派の、ロシアではロシア正教徒❺の反発にあって失敗した。こうしたあいつぐ戦争でポーランドの財政は破綻し、中央集権化の試みも頓挫した。弱体化したポーランドは、18世紀後半に国土を周辺諸国によって奪われ(ポーランド分割 1772, 93, 95)、国家として消滅した❻。



ポーランド分割 分割を描いた風刺画で、左からロシアのエカチェリーナ2世、王冠の落ちそうなポーランド王、オーストリアのヨーゼフ2世、プロイセンのフリードリヒ2世を示している。18世紀後半の北欧・東欧での最大の事件は、このポーランド分割であった。

一方、16世紀前半にデンマークの支配を脱して独立王国となった→p.133スウェーデンは、絶対王政化を開始し、三十年戦争→p.188ではドイツの要所にも領土を広げて、デンマークにかわってバルト海地域の覇権を握った。スウェーデンは、経済的には製鉄が盛んだったが、ほかの北欧諸国と同様に人口が少なく、18世紀初めにバルト海への進出をはかるロシアとの北方戦争→p.196に敗北して、急速にその地位を低下させていった。

❺ロシアはギリシア正教を国教としていたが(→p.124)、その本拠地であったビザンツ帝国の衰退(→p.123)もあって、独自のロシア正教を発達させていた。

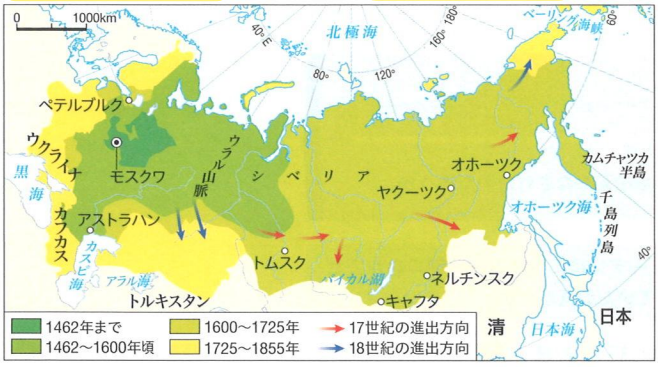
❻この危機に際して、1794年にコシューシコ(1746～1817)が蜂起して独立運動を試みたが、ロシアに鎮圧された。

ロシアの大国化

Q ロシアはどのようにして、ヨーロッパの主権国家体制に参入していったのだろうか。

ロシアでは16世紀以降、モスクワ大公国→p.124のイヴァン4世(Ivan IV 在位1533～84)が、キプチャク＝ハン国分裂後の権力の空白を利用して、東方・南方に領土を広げた。また、彼は貴族を官僚に登用し、皇帝へ権力を集中する独自の絶対王政

・ステンカ＝ラージンの農民反乱が鎮圧されたのちに、ピュートル1世は帝位についた
・プガチョフの農民反乱をきっかけに、エカチェリーナ2世は友動化し、農奴制を強化した



ロシアの領土拡大


ひげを切られるロシア貴族　ロシア人にとって、ひげは伝統文化とギリシア正教のシンボルであった。これに対してピョートル1世は、ひげを切らないものに「ひげ税」を課した。

※1 フランスの啓蒙思想家ヴォルテールとも親交のあった啓蒙専制君主

(ツァーリズム)を確立した。ただし、当時のロシアは、バルト海や黒海にまで領土が達しておらず、独自の内陸的世界を形成していた。同世紀末にイヴァンが死去すると、ロシアは動乱の時代を迎えたが、17世紀初めにロマノフ朝(Romanov 1613～1917)が成立し、新国王が選出されて混乱は終息した。ミハイル＝ロマノフが創始した。

17世紀半ばにロシアは、国境地帯のコサック❶を支援しつつ、ポーランドと争ってウクライナ地方を獲得した。さらに、同世紀末に即位したピョートル1世(Petr I 在位1682～1725)(大帝)は、ロシアを大きく変化させた。彼は多くの専門家を西欧からまねいて軍事改革と先進技術の導入につとめ、社会慣習も西欧風に改めさせた。対外的にはバルト海地域への進出をはかり、バルト海沿岸に新首都ペテルブルクを築き、北方戦争(1700～21)でスウェーデンに勝利して同地域の覇権を握った❷。また東方でもシベリアを経て極東に領土を広げ、中国の清とネルチンスク条約(1689)→p.170を結んで国境を定め、通商を開いた。18世紀後半のエカチェリーナ2世(Ekaterina II 在位1762～96)※1は、日本にも使節を送ったほか、ラクスマンオスマン帝国からクリミア半島を奪って❸黒海に進出する一方、弱体化していたポーランドをプロイセン・オーストリアとともに分割→p.195し、両国と直接に国境を接するようになった。

プロイセンとオーストリアの動向

Q▸ プロイセンとオーストリアの関係は、どのように展開したのだろうか。

18世紀の北欧・東欧においてロシアと並んで台頭したのが、プロイセン(Preussen)とオーストリアであった。プロイセンは、神聖ローマ帝国外のドイツ騎士団領→p.132から昇格したプロイセン公国と、帝国内のブランデンブルク選帝侯国→p.132との同君連合❹によって成立したプロテスタント国家であり、三十年戦争→p.188後にフリードリヒ＝ヴィルヘルム(Friedrich Wilhelm 在位1640～88)(大選帝侯)が絶対王政化に乗り出した。彼は常備軍を強化し、その費用として恒常的な課税を議会に

スペイン継承戦争で神聖ローマ皇帝をたすけて1701年に王国に昇格した。

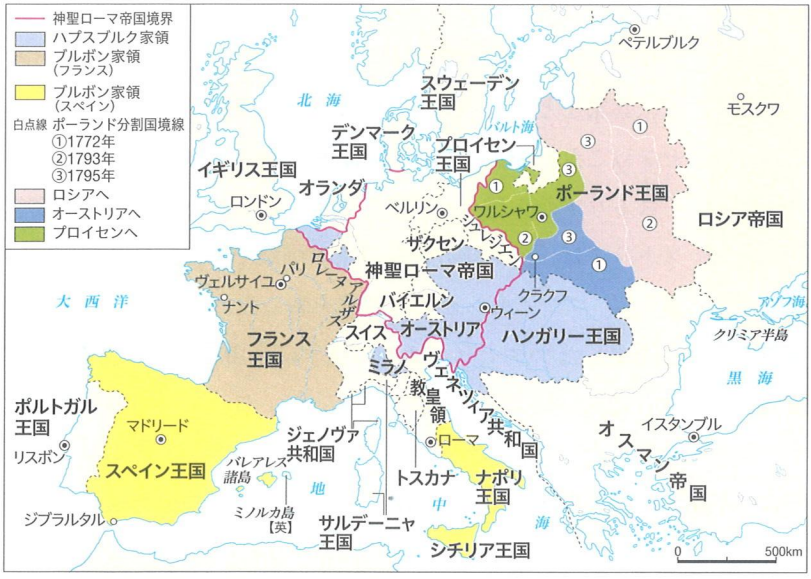
「兵隊王」と言われたフリードリヒ＝ヴィルヘルム1世

❶コサックは、農奴制から逃れた農民を起源とする武装集団であり、ロシアの拡大にともなって、半自治権を与えられて国境警備の任にあたることもあったが、周辺地域の略奪もおこなった。ステンカ＝ラージン(1630～71)やプガチョフ(1742頃～75)など反乱をおこすコサックも現れたが鎮圧され、彼らの自治権は縮小されていった。

❷北方戦争の勝利を受けて、イヴァン4世が用いていた皇帝の称号とロシアの帝国としての地位が、18世紀中に各国に承認されていった。

❸これ以降、オスマン帝国の衰退と、それに乗じたロシアの勢力拡大が、ヨーロッパ国際政治における重要な問題となった(→p. 242)。

❹この結果、ホーエンツォレルン家の当主が両国の君主となった。



18世紀半ばのヨーロッパ

認めさせるかわりに、地方の領主貴族(ユンカー(Junker))の農奴(のうど)支配を正式に認めた。また、中央政府と官僚制の強化を進め、フランスから亡命(ぼうめい)したユグノーを受け入れてその産業技術を活用した。その後、プロイセンは1701年に王国へと昇格し、富国強兵策(ふこくきょうへい)を進める一方、対外戦争を避けて財政の均衡(きんこう)を保った。→p.193

他方、オーストリアは、ハプスブルク家の当主(オーストリア大公(たいこう))が神聖ローマ皇帝を兼(か)ねて帝国の中核をなしてきたが、三十年戦争後の帝国の形骸化(けいがいか)により、東欧の一君主国に等しい存在となった。しかし、オーストリアは帝国を圧迫してきたオスマン帝国を1683年のウィーン包囲戦(第2次)で撃退し、99年のカルロヴィッツ条約ではハンガリーなどを奪回(だっかい)して、威信(いしん)を増大させた。→p.125、163 ただし、チェコ(チェック)人のベーメンに加えてマジャール人のハンガリーなど、非ドイツ系の人々を多数派とする地域を支配下にもったことは、その後の中央集権化を進めるうえでの難題となった。

こうしたなか、18世紀前半にハプスブルク家で男子の継承(けいしょう)者がとだえると、皇女マリア＝テレジア(Maria Theresia 在位1740～80)が大公位を継承した❺。この動きに対して、プロイセンの強力な軍隊と健全な財政を引き継いだ

❺女性の皇帝は神聖ローマ帝国では認められなかったが、ハプスブルク家では、男系がとだえた場合の女性による家門継承を定めていた。この継承を各国に承認させることは、18世紀前半のオーストリア外交の重要な課題となった。

マリア＝テレジアとその家族
マリア＝テレジア(右から2番目)、夫の神聖ローマ皇帝フランツ1世(左端)、その長男でのちのヨーゼフ2世(右から5番目)らの姿がみえる。





サンスーシ宮殿でフルートを演奏するフリードリヒ2世
彼は狩猟や舞踏よりも読書や音楽を愛した。

フリードリヒ2世（Friedrich II 在位1740～86）（大王）は、領土分割をもくろんで他国とともに異議をとなえ、**オーストリア継承戦争**（1740～48）が勃発した。プロイセンはこれに勝利して、資源の豊かな**シュレジエン地方**をオーストリアから奪って領土を大きく拡大した。このためオーストリアは、イタリア戦争以来の仇敵であったフランスと同盟し❶、プロイセンと**七年戦争**（1756～63）を戦った。しかし、イギリスと同盟したプロイセンはこの戦争に辛勝して領土を維持し、さらにポーランド分割をおこなって、ヨーロッパの強国としての地位を確立した。一方のオーストリアでは、マリア＝テレジアが行財政・軍制・教育などを改革し、以後も大国としての地位を維持した。

→p.184

啓蒙専制主義

Q 啓蒙専制主義の特徴は、どのようなものだろうか。

プロイセン・オーストリア・ロシアのように東欧・北欧で勢力を広げた諸国は、**啓蒙専制主義**と呼ばれる体制のもとで様々な改革を導入した。この体制では、啓蒙思想の影響を受けた君主が、農業・商工業の奨励、死刑・拷問の廃止、初等教育の拡充、宗教的寛容の実現などの改革をおこない、臣民の幸福の増大も目的の1つに掲げられた。

プロイセンの**フリードリヒ2世**は、「君主は国家第一の僕」と自称して一連の改革をおこなった。またアカデミーを復興し、繊細優美な**ロココ様式**❷にもとづくサンスーシ宮殿を造営して思想家ヴォルテールや音楽家バッハ（Bach 1685～1750）らをまねいたため、首都ベルリンは文化的にも発展した。オーストリアのマリア＝テレジアとその子**ヨーゼフ2世**（Joseph II 在位1765～90）も同様の改革をおこない、税制の改革や官僚制の整備も進める一方、カトリック教会への統制を強めて修道院を解散させた❸。文化的には、首都ウィーンはモーツァルト（Mozart 1756～91）ら音楽家が集う音楽の都となった。ロシアのエカチェリーナ2世は、文芸の保護や社会福祉・地方行政制度の充実なども改革に組み入れた。

→p.201
→p.196

こうした改革を通して、プロイセン・オーストリア・ロシアはヨーロッパ国際政治における地位を向上させた。しかし、その統治体制は、イギリス・フランスなど西欧の先進国に対抗し、東欧の君主みずからがリーダーシップをとって富国強兵をめざすものであったため、身分制など社会の根幹は変更されなかった❹。

啓蒙専制君主の典型

絵画ではフランスのワトーが活躍した

❶覇権を争ってきたハプスブルク家とフランス王家が友好関係を結んだこのできごとは「外交革命」とも呼ばれ、イギリス・プロイセン・ロシアの台頭による諸国の勢力関係の変化を反映していた。

❷18世紀のフランスを中心として発展した、室内装飾・絵画・建築などにおける美術様式。

❸一連の改革の結果、フランス革命時のオーストリアは、フランスに匹敵する人口を擁し、プロイセンの2倍の税収、およびヨーロッパ最大級の軍隊をもつにいたった。

❹エカチェリーナ治世下のロシアでは農奴制はむしろ強化され、コサックのプガチョフ（→p.196）を指導者とする農民反乱（1773～75年）をまねいた。ただし、オーストリアでは農奴解放が進められた。

6 科学革命と啓蒙思想

Q▸ ルネサンスと科学革命は、社会に与えた影響という点においてどのように異なるのだろうか。

科学革命

Q▸ 科学革命には、自然法則の発見のほかにどのような面があったのだろうか。

中世後期のヨーロッパにおける自然探究は、古代ギリシアの著作にもとづいていた。しかし近世に入ると、南北アメリカ大陸の「発見」や錬金術・天文学の発達によって、自然界に関する古代の著作の権威は崩れ❺、自然を新たに解釈しようとする動きが始まった。→p.73

17世紀のガリレイ(Galilei 1564～1642)やニュートン(Newton 1642～1727)らは、はじめて高精度の望遠鏡を駆使して観測データを集め、天体の運動法則を解明した。同じ頃に顕微鏡も発明され、肉眼ではみえない世界への探究も始まった。こうして観察の対象となる自然界そのものが拡大したが、そのうえで、観察と実験を経て自然界の諸現象にひそむ法則を解明し、さらに解明された法則を検証によって確認するという自然科学の基本的な手続きが確立された❻。またこの時代には、各種の科学協会やアカデミーが創設され、専門的な科学者が活動する場が整備されつつあった。こうした一連の変化を**科学革命**と呼ぶ。

科学革命の結果、ヨーロッパ人の自然観には根本的な変革がもたらされたが、こうして急速に進歩しはじめた自然科学は、自然界を人間が正確に認識していることを前提としていた。これを思想面で保証したのが、フランスのデカルト(Descartes 1596～1650)である。彼は、全能の神から生まれつき与えられた人間の理性が明晰に正しいと認めるものであれば、

❺一方、人文主義(→p.177)の発達もあって、人間の性質や政治のあり方に関する古代の著作の影響力は存続した。

❻現象から法則を発見する思考法は帰納法、法則から現象を説明する思考法は演繹法と呼ばれる。

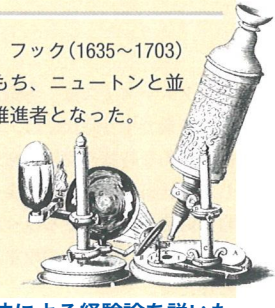
17～18世紀の自然科学と哲学・社会科学

伊＝イタリア　英＝イギリス　仏＝フランス　独＝ドイツ

ガリレイ(伊)	望遠鏡の改良	フランシス＝ベーコン(英)	『新オルガヌム』
ケプラー(独)	惑星運行の法則	デカルト(仏)	『方法序説』
ハーヴェー(英)	血液循環論	パスカル(仏)	『パンセ(瞑想録)』
ボイル(英)	気体力学	スピノザ(オランダ)	『エチカ(倫理学)』
ニュートン(英)	万有引力の法則・『プリンキピア』	ライプニッツ(独)	『単子論』
フック(英)	『ミクログラフィア』	グロティウス(オランダ)	『海洋自由論』『戦争と平和の法』
リンネ(スウェーデン)	植物分類学	ホッブズ(英)	『リヴァイアサン』
ラヴォワジェ(仏)	燃焼理論	ロック(英)	『統治二論』
ジェンナー(英)	種痘法	カント(独)	『純粋理性批判』
ラプラース(仏)	宇宙進化論		



フックが発明した顕微鏡　フック(1635～1703)は自然現象全般に関心をもち、ニュートンと並ぶイギリスの科学革命の推進者となった。



ニュートン式反射望遠鏡(レプリカ)　天体像を内部の鏡に反射させたうえ、レンズで拡大する仕組みを実用化し、観測精度を高めた。

・イギリスのフランシス＝ベーコンは事実の観察を重んじ、そこから一般法則を導く帰納法による経験論を説いた。
・フランスのデカルトは、数学的な論証法をもちいる演繹法による合理論を打ち立てた。

すべて真実とみなしてよいとした❶。デカルトの哲学により、近世以降のヨーロッパ思想の柱の1つとなる、理性を万能視する**合理主義**が確立された。合理主義は秩序と調和を重んじる姿勢を生み、これは芸術における**古典主義**に反映された。デカルトの影響は全ヨーロッパに広がったが、これに対してイギリスの**ロック**→p.192は、人間の思考では、生後に獲得される知識と経験が決定的な役割を果たし、思考の正確さも絶対的なものではなく確実性の違いにすぎないとして反対し、こうした姿勢は**経験主義**として確立された。さらに、ドイツの**カント**（Kant 1724～1804）は合理主義と経験主義の2つの立場を統合しようと試み、**観念論哲学**への道を開いた❷。

人間の理性への信頼は、法学の分野でも広まった。現実に定められた法である実定法とは別の、理性を備えた人間に普遍的に共通するルールとして想定された**自然法**を探究しようとする試みが、**ホッブズ**→p.191らによって始められた。また、**グロティウス**（Grotius 1583～1645）は自然法の理論を国家関係の分析に適用することで、**国際法**理論を創始した。

また、科学革命や新しい哲学の発展を受けて、17世紀末から18世紀初めにかけての西欧では、古代人と現代人のどちらがすぐれているかの論争がおこった。これに現代人派が勝利したことで、西欧では**進歩主義**の考え方が優勢となり、人間の歴史も、よりよい時代に向かって無限に進歩していくことが可能であるとの考え方が広まった。

啓蒙思想

Q 啓蒙思想は、どのような点で「実用の学」といえるのだろうか。

・啓蒙思想は経済の領域にも適用され、「経済表」の著者であるケネーらは重農主義の理論をうんだ

17世紀の学知の展開は、おもに知識人のあいだでなされたものだったが、18世紀には、すべての人間を対象に、現実世界における幸福を増大させるために有用な知識を集積して広めようとする**啓蒙思想**が広まった。啓蒙思想家たちは、そのために国境をこえて議論をおこない、為政者に直接働きかけたり、世論を通じて為政者に改革を要求したりした。

人間の幸福を増やす手段の1つとされたのが物質的な富の増大であり、フランスのテュルゴ（Turgot 1727～81）や、『諸国民の富（国富論）』を著したイギリスの**アダム＝スミス**（Adam Smith 1723～90）らは、人類社会とくに西欧諸国が、農耕を中心とした自給自足的な段階から、分業と交換が世界規模で発達した商業段階へ移行しつつあると考え、**古典派経済学**を創始した❸。

❶こうした姿勢は、奇蹟を教義の柱の1つとするキリスト教への批判ともなった。

❷カントによれば、人間の理性は生来合理的な性質を備えているため、神や経験に頼らずとも自然界を秩序だったかたちで把握できるが、こうした理性を通じた認識は、対象の事物そのものを知ることにはならないとされた。

❸アダム＝スミスは、各国が国際商業で争う時代では、重商主義的な特権や規制は撤廃して、経済の不都合は市場の自動調節機能に任せるほうがよいとする自由放任の政策をとなえた。

「哲学書簡」でイギリスを賛美した。(暗にフランスを批判した)

宗教面でも、ヴォルテール(Voltaire 1694～1778)らの著作により、国家・君主の信仰とは異なる宗派のキリスト教を容認する姿勢(**宗教的寛容**)が広まり、宗教改革以来のヨーロッパにおける宗教的迫害や対立はしだいに収束に向かった。→p.198



18世紀フランスのサロン
サロンは、私人の家の客間でもよおされた。主人は女性も多く、知的で洗練された会話がかわされ、非合法の出版物と並んで、フランス世論の発信地となった。

政治および国家に関しては、権力者による抑圧を防ぎ、人間の自由を守るための体制が様々に考案された。**モンテスキュー**(Montesquieu 1689～1755)は『法の精神』を著し、歴史上の諸国家・文明の考察を通じて、イギリスの立憲君主政を例に権力の分立と王権の制限を主張した。他方で**ルソー**(Rousseau 1712～78)は、文明の進展がむしろ人間の自由を制約していると考え、『社会契約論』を著して、各人が社会と契約してすべての権利を譲渡したうえで、直接民主政のかたちで統治に参加することによって自由と平等を回復すべきと論じた。

人民主権論を主張した。



18世紀初めのロンドンのコーヒーハウス　人々の自由な交流の場で、新聞のようなものを読む客もいれば、パイプを楽しむ客もいる。中央では喧嘩騒ぎもおこっていて、一人の客が飲物を相手にぶちまけている。こうした生活文化から世論は誕生した。

啓蒙思想の最大の成果が百科事典である。18世紀には、フランスのディドロ(Diderot 1713～84)やダランベール(d'Alembert 1717～83)らが編纂した『百科全書』のほか、各国で百科事典が刊行された。博物館や植物園もこの時代に登場した。啓蒙思想は基本的に文字・図像を通して広められたが、これは、書物に限らず新聞・雑誌などの出版業が18世紀後半のヨーロッパで発達したことを背景としていた。こうした出版物は、ロンドンやパリのコーヒーハウス・カフェ・クラブ・サロンといった集いの場で読まれ、討論の対象となったことで、**世論の形成**をうながした。また、ヨーロッパ外への空想旅行記が流行し、デフォー(Defoe 1660～1731)の『ロビンソン＝クルーソー』やスウィフト(Swift 1667～1745)の『ガリヴァー旅行記』などがベストセラーとなった。

啓蒙思想の推進役となった知識人は、啓蒙専制君主や開明的な貴族といった上流階級だけでなく、**ブルジョワ**(bourgeois)(市民)からも生まれていた。近世のブルジョワは都市の商業を基盤に富を蓄積し、上流階級の華やかな宮廷文化とは異なる独自の文化を形成しはじめた。のちに彼らは経済力を基盤にして、各国で政治の主役の座をめぐって国王ら旧来の支配階層と争った。これに対して、参政権をもたず、文筆に訴えることもなかった民衆は、食料価格・労働条件・課税などをめぐって、自分たちの意思表明の手段として暴動や一揆をおこした❹。

❹これらは反乱や革命に直結するものではなかったが、その伝統は政治的蜂起や労働争議となって、近代に継承された。

第Ⅱ部

まとめ

交流圏の拡大

ユーラシアの諸地域では、古代国家の解体後、新しい制度や理念をもつ国家や社会が形成され、これらの地域を結ぶ交流がいちだんと活発になった。それを促進した動きとして、まずイスラーム勢力の拡大をあげることができるだろう。イスラーム勢力は、地中海地域に進出してキリスト教圏と対抗・交流の緊密な関係を結ぶとともに、中央アジアおよび南アジア、東南アジアにその教えを広げた。一方、13世紀にユーラシアの広大な領域を支配下に入れたモンゴル帝国の役割も大きい。帝国内の東西交通路が整備され、ヒト・モノ・文化の交流は急速に進んだ。さらに、この時期の交流のなかでヨーロッパに知られるようになったアジアの富への憧れも一因となり、15世紀末には、海を主要舞台として、「世界の一体化」と称されるような大規模な交流が始まった。これにより、ヨーロッパ人に征服されてその植民地となったアメリカ大陸も含めて、諸大陸の人々の生活と広域的な世界の動きとの関わりが深まっていくこととなった。

交流の活発化と様々な国家体制

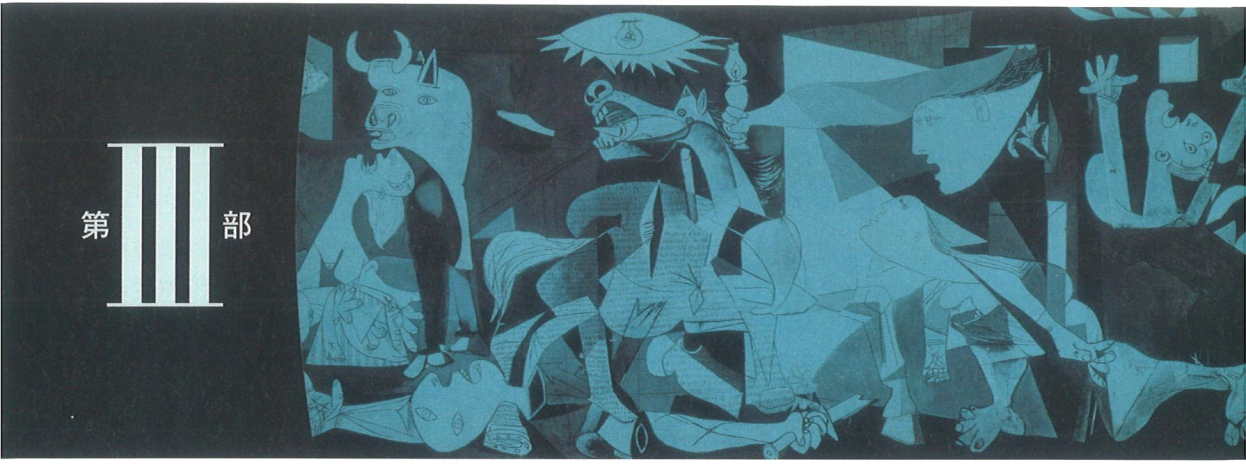
交流の拡大は、世界各地の人々の暮らしを結びつける一方で、激しい競争や対立を生み出し、対外的な対抗意識を強めていった。ヨーロッパでは、封建社会の仕組みがしだいに崩れて中央集権化が進み、教皇権の衰退ともあいまって、明確な国境をもつ主権国家が並立する国際秩序が形成された。これらの国々は、国内の統合を強化しつつ、経済的・軍事的な優位をめざしてたがいに争った。一方、アジアの多くの地域では、ヨーロッパの主権国家よりはるかに規模の大きな諸帝国が、領域内の多数の民族を支配するとともに、周辺地域にも影響をおよぼしつつ繁栄した。19世紀以降、西欧諸国による世界支配が進むにつれて、主権国家体制が世界に広まっていくが、18世紀以前には、広域をゆるやかに統治するアジアの大帝国の富と力は、ヨーロッパ諸国をしのぐものとみなされていたのである。

まとめの問い

① 古代国家の解体後、広域的な交流は活発化したが、各時代でそれぞれどのような特徴があったのだろうか。地理的範囲、交流の内容、担い手などの観点から比較してみよう。

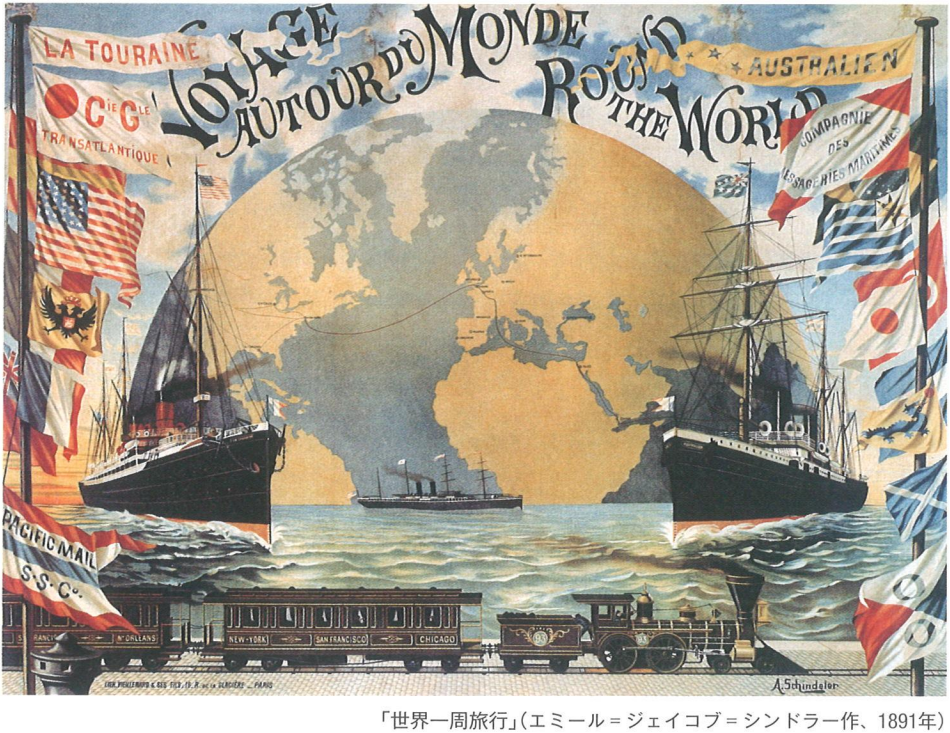
② 第Ⅱ部に登場する諸国家は、他国との交易や国内の文化的・宗教的な多様性について、どのような態度をとっていたのだろうか。いくつか取り上げて、その特徴を考えてみよう。

第Ⅲ部



諸地域の結合・変容

第Ⅲ部では、およそ18世紀後半から20世紀前半の世界の歴史を学ぶ。この時期には、諸地域の結合がいっそう強まって、政治・経済・文化など様々な面で相互に依存するようになり、地球規模での「世界の一体化」が加速した。そして、国民国家の形成や植民地支配の拡大などを背景とする国際対立の激化にともなって二度の世界大戦が勃発し、諸地域は大きく変容していくことになる。

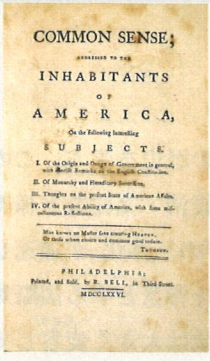


「世界一周旅行」(エミール＝ジェイコブ＝シンドラー作、1891年)

第Ⅲ部を学ぶ前に

諸地域の結合・変容は、どのように進んだのだろうか？

第Ⅲ部で扱う地球規模での一体化や相互依存の強まりは、様々な面で進行した。なかでも、情報を伝達する媒体や技術が発達し、とくに19～20世紀にかけて新聞やラジオといった、多数へ情報を発信できるマスメディアが登場したことは、世界史における１つの画期といえるだろう。ここでは、様々な資料をもとに、メディアが人々の生活や社会におよぼした影響について考えてみよう。



A『コモン＝センス』（1776年、米）



B「過去」と題された民衆版画（18世紀、仏）



C ビラに群がる人々を描いた風刺画（1848年、墺）

A・B・Cにみられるように、環大西洋革命が進んだ18世紀後半～19世紀半ばの欧米では、おもにどのようなメディアが使われたのだろうか。

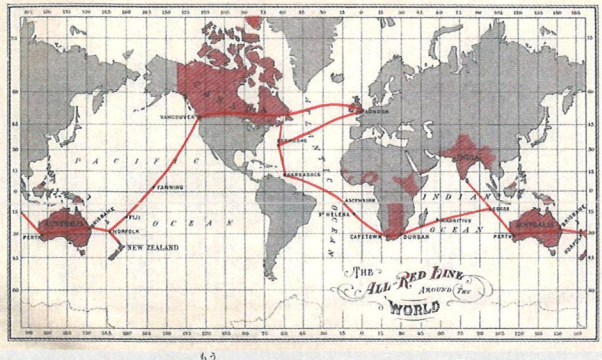


D新聞掲載の公開状「私は弾劾する」（1898年、仏）



E雑誌『新民叢報』（1902年創刊）

D～Gにみられるように、19世紀後半から20世紀初めの世界では、どのようなメディアが発達したのだろうか。また、Fにみられるように、それらは世界や当時の社会にどのような影響を与えたのだろうか。



F世界を一周する電信網（20世紀初め）

これまでのどんな法律、教訓、規則よりも、新聞で暴露されるかもしれないという恐怖のほうが、犯罪、不道徳、悪事を防ぐのに役立っている。
（佐藤卓己『現代メディア史』）



Gピュリッツァー



H プロパガンダ=ポスター（第一次世界大戦期、英）



襲強を地據根敵の洋平太東

ミツドウエー沖に大海戦
アリユーシヤン列島猛攻
陸軍部隊も協力要所を奪取

米空母二隻 エンタープライズ・ホーネツト上 撃沈
わが二空母、一巡艦に損害

太平洋の戦局此一戦に決す

米攻防の戦略基點
北方後退線上に扇る

濠

I 新聞報道（太平洋戦争期、日）

H・Iにみられるように、二度の世界大戦において、各国ではどのようなメディアが、どのような目的で用いられたのだろうか。



J 映画館（1920年代、米）



K 商品広告ポスター（1923年、米）

ラジオ文明とわれわれが呼びなすべきところの時代がきた。それは一つの革命である。一つの世界革命である。今日、われわれの眼前において展開されているところの世界の変動は、言葉のいかなる誇張もなくしていいえられるところの、一つの世界革命である。レーニンの世界革命が失敗に終ってから、一つの更に大なる、そしてより根本的なる世界革命がきたのである。……

有線は個人的である。無線は集団的である。前者は個人主義を代表し、後者はコレクチビズム（集産主義）を代表する。前者は相互的である。後者は命令的である。前者は自由である。後者は独裁である。……

大衆を聴き手としてここに少数の語り手がある。少数のもの、そして同時にはただ一人のものが語り、そして彼以外の万人が耳を傾けるのである。そしてまたラジオの発達とともにしばしば一人のものが語りて世界の他の全てのものが耳を傾けることさえも想像されるのである。ナポレオンといえどもその号令のおよぶところは数十万の兵士であったのに対して、ラジオ放送局の壇上に立つものは今や世界を彼の聴き手として立つことが可能なのである。

（室伏高信「ラヂオ文明の原理」『改造』1925年7月）

L ラジオ放送に関する論評

J～Lにみられるように、20世紀前半には、どのようなメディアが登場・発達し、また社会とどのような関わりをもっていたのだろうか。

Q 資料に対する疑問や興味、または関心のある視点にもとづいて、自分自身で第Ⅲ部への問いを立ててみよう。